

SEMINAIRE OUVERT PERMANENT

juillet 2006

セミナー通信 2006年7月

公開セミナー『心的構造論』 藤田博史（精神分析医）

第41回第41講「精神病の構造的治療理論とその治療技法（29）」

2006年7月8日（土） 13:30-16:30（開場時間も13:30になります）

第42回第42講「精神病の構造的治療理論とその治療技法（30）」

2006年8月5日（土） 13:30-16:30（開場時間も13:30になります）

第43回第43講「精神病の構造的治療理論とその治療技法（31）」

2006年9月9日（土） 13:30-16:30（開場時間も13:30になります）

会場：日仏会館 509号室 聴講料:1000円

日仏会館 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 JR 恵比寿駅東口から「動く歩道」経由で徒歩 10分

主催：ユーロクリニック 協賛：ドル・フォーラム・ジャパン

問合せ先：ユーロクリニック文化部 TEL: 042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

SÉMINAIRE OUVERT PERMANENT

FUJITA, Hiroshi (psychiatre-psychanalyste)

Le 41ème SÉMINAIRE samedi 8 juillet 2006-----13h30-16h30

Le 42ème SÉMINAIRE samedi 5 août 2006-----13h30-16h30

Le 43ème SÉMINAIRE samedi 9 septembre 2006-----13h30-16h30

SALLE#509 DE LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

Frais de participation :1000yen LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

10 min.à pied depuis la Sortie Est de la Gare d'Ebisu(ligne JR Yamanote)

Organisation:L'EUROCLINIQUE Collaboration:DOLL FORUM JAPAN

Renseignements: DIVISION CULTURELLE DE L'EUROCLINIQUE

TEL: 042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

発行
EUROCLINIQUE
編集
ユーロクリニック文化部

	目次		
公開セミナー案内	1	心の問題を構造から考える 水上雅敏	5
『セミナー断章』藤田博史講義	2	ヨーロッパ美術紀行 清水由美子	6
		ユーロクリニック案内	7
今年はフロイト生誕 150 周年	4	マンスリー連続対談案内	8

SÉMINAIRE OUVERT PERMANENT

公開セミナー『心的構造論』より

「セミナー断章」

講義 藤田博史 編集 榊山裕子

Le 37ème SÉMINAIRE et le 38ème SÉMINAIRE

第37回、第38回公開セミナーより「道徳・倫理・献身」

日仏会館（東京・恵比寿）

今年5月、藤田博史著『性倒錯の構造 増補新版』が青土社より発売され、新たに書き下ろし論文「性倒錯のトポロジー 道徳・倫理・献身の位相」が付け加えられた。今回の「セミナー断章」は、この論文の内容と密接な関係にある今年3月と4月の公開セミナーから、主に「献身」に関わる部分を抜粋して掲載することとした。論文「性倒錯のトポロジー」を読み解くための補助としてご利用いただければ幸いである。

2006.3.11のセミナーより

1 「道徳」「倫理」「献身」

精神分析的に再構成される世界は——あるいはわれわれが今ここで生きている世界について精神分析はどういう仮説を立てるか、という——想像的な領域（想像界）l'imaginaire、象徴的な領域（象徴界）le symbolique、現実的な領域（現実界）le réel、その3つの領域とその重なりとかその相互関係によって構成されているという仮説を立てるわけです。そして現実界と象徴界との間の領域に生じてくるこれ（図1—4ページ）を倫理 l'éthique と呼びます。エートス ethos 習慣、が語源になっています。ギリシャ語のエートス ἦθος です。

通常論じられるのは「倫理」と「道徳」ですが、わたしはここに新しくもう一つ概念を導入したいとおもいます。これはラカンが言っているのではなくわたしが言っていることですが、この領域（図2—4ページ）に対して「献身」という概念を導入します。

「献身」をフランス語で表現すると le dévouement となります。フランス語の手紙を書くときに「l'expression de mes sentiments dévoués（わたしの献身的な気持ちの表現）」という決まり文句がありますが、dévouer というのは捧げるという動詞です。sacrifice という似たような言葉がありますが「犠牲 sacrifice」ではありません。「犠牲 sacrifice」は宗教的な意味を内包しています。つまり sacrifice ではなくて dévouement なのです。

道徳 la morale、倫理 l'éthique、献身 le dévouement、この「献身」の位相について考察を加える必要があると思うのです。「道徳」とか「倫理」に関しては、カントをはじめとしてさまざまなことが言われてきているわけですが、ざっとおさらいをすると「道徳 la morale」という領域は「こうしてはいけない」「ああしてはいけない」という領域で、これは民族とか国とか文化とか習慣とか歴史によって変化するものです。「日本の常識、世界の非常識」という言い方がありますが、日本の道徳は世界の道徳ではないということです。たとえば「この子、かわいいね」と頭をなでることは外国ではやってはいけない。勝手に人の子の頭をなでることは失礼にあたる。たとえばイスラム圏では道徳とされているものがキリスト教圏では違っているというようなこともあるでしょう。「道徳 la morale」というのはそういう意味では、これと言えるような「絶対的なもの」ではなくて「相対的なもの」です。

それに対して「倫理 l'éthique」はもう少し厳密な分野になってきます。人間そのものが置かれている根源的な条件に照らした時に「人間が為すべきことはなにか」というようなものです。「道徳」を「相対的なもの」と呼ぶならば、「倫理」はその性質として「絶対的なもの」、人間として何かそう行すべきもの、「当為」に関わるなにかです。「当為」はフランス語では devoir といいます。「当然すべきものは何か」「当然目指すべきものは何か」「人間が国とか民族とかを超えて人間存在として共通して目指すものは何か」ということです。ここで参照されるべきテーマはアリストテレスの「ニコマコス倫理学」でしょう。フランス語で書きますと Éthique de Nicomaque。この書物では「善」や「幸せ」とは何かということが語られています。どのような職業に就いている人もどのような階級にある人も、皆共通して目指しているものは「幸福」であり「善」であるというものです。一番きちんとした形で書かれている倫理の本はなにかと問われたならば、わたしは迷うことなくアリストテレスの「ニコマコス倫理学 Éthique de Nicomaque」を挙げるでしょう。もう一つは同じくアリストテレスの「エウデモス倫理学 Éthique d'Eudème」、こちらはニコマコスほどは知られていませんが、それも参照に値するでしょう。

「倫理」とはということかということ、それがイスラム圏の人であろうが、キリスト教圏の人であろうが、仏教圏の人であろうが、無宗教の人であろうが、人として生きていく根本的な「当為 devoir」についてしっかりと考えてゆく領域です。「人はなぜ生きているのか？」というような問いに一定の答えを与えてくれるものが「倫理 l'éthique」です。

2 「意味」「ファルス享楽」「大文字の他者の享楽」

「道徳」も「倫理」も共通して抱えているのは象徴的な領域です。つまり「象徴的なもの」が関与している。「道徳」においては「象徴的なもの」が「意味」として関与している。「倫理」においては「象徴的なもの」がどのような形で関与しているかということ、「象徴的なもの」が与える一つの快楽」として関与しているのです。

「象徴的なもの」が、これをやってはいけないとか、これをする人を幸せになるとか、年上の人を敬いなさいとか、「意味」として関与しているのは「道徳」です。「倫理」の方はむしろ「象徴的なもの」がひとつの快楽を与えてくれるようなことです。その快楽のあり方もどちらかというとな動的な快楽なのですが、ラカンの言う「ファルスの快楽」あるいは「ファルスの享楽 Jouisance phalique」と言ってもいいでしょう。だから「倫理 l'éthique」の

領域には「ファルスのな享楽 Jouisance phalique」が含まれるということです。すなわち E \supset JΦ です。一方「道徳 la morale」の領域には「意味 sens」が含まれる。すなわち M \supset Sens です。「ファルス享楽 jouissance phalique」が「倫理」の領域に含まれるというのはどういうことかという、習慣とか歴史とかある民族とかそういうものは、その民族固有のあるいはその歴史に固有の「意味」を抱えている。ですから当然「道徳」の領域はある集団、ある歴史、ある地域、そういう「意味 sens」によって変化しています。これに対して「倫理」の領域は「ファルス享楽」です。(図3-4ページ)「ファルス享楽」というのは人間として共通の享楽なのです。エスキモー人であろうが、アラブ人であろうが、アフリカ人であろうが、西洋人であろうが、東洋人であろうが、ファルスのな快楽——ありきたりな言い方をすれば男性が獲得するような快楽——は、人類に共通していると言ってもいいかもしれません。そういう水準です。

3 相対と絶対

一つの喩えを言えば「道徳」が一つの平面上でおこってくるもの——平面というのはいろいろな地図みたいにあそこもあればこちらもあり「あっちの水は甘いよ、こっちの水は苦いよ」とか平面の上で様々におこってきているもの——だとすれば、「倫理」はその平面の地下と天を結んでその垂直方向に起こってくるような何かそういう関係性です。

「道徳」というのはどちらかという平面的な関係性です。一方「倫理」は垂直方向の天国と地獄の間に挟まれていると考えてもよいでしょうし、あるいは生と死の間に生じてくる何ものかと言ってもいいし、死とシニフィアン(シニフィアン)の間に起こってくる何ものかと言ってもよいかもしれません。そういう領域が「倫理」です。ですから「倫理」は大げさに言えば人類に共通する一つの問題とか課題です。

ここまで話してきて第3の領域「献身 le dévouement」ですが、「献身 le dévouement」というのは今は象徴的な部分が含まれていないのです。つまり「献身」は、想像的な領野と現実的な領野との間に生じて来る。ラカンの言い方をすると、ここで働いているのが「大文字の他者の享楽」と呼ばれているものです。フランス語で Jouisance de l'Autre。ですから「献身 le dévouement」は Joissance de l'Autre。すなわち D \supset A' (grand A barré) です。

この「他者」というのは非常に大きな謎であり、「他者の享楽」というのは有り体な言い方をすれば女性が獲得しているような快感のことです。たとえば男性が射精する瞬間に感じている快楽と、女性がもうこれ以上快感を得ることができないと思っている快楽が違うという前提に立っています。「ファルス享楽」が男性的な享楽とすれば、「他者の享楽」は言ってみれば女性的な享楽の領域……これは何だかわかりませんが、というのは女性というのは積極的に語ることはできないので……ただ一応こういう風を書く。

4 可知と不可知

「道徳」は「相対的なもの」であって、「倫理」が「絶対的なもの」であるとするならば、「献身」の領域はどのように呼ばよいかということ。すなわち「絶対」と「相対」しかないではないか、と思われるかもしれません。「献身」の領域というのは「道徳」とは違って人類に全て共通する領域だと考えれば、これは「絶対的なもの」です。ただしその「絶対」とか「相対」とかという評価自体は「象徴的なもの」を含んではじめてなされるものである、この領域をあえて表現するとすれば次のようになるでしょう。

「絶対」とか「相対」ということをわれわれが認識するには「象徴界」を経ているわけですから、この二つはどちらとも認識可能な領域です。だからこの「絶対」も「相対」も結局は「可知的な領域」、つまり知ることが可能な領域であるのに対して、「献身」の領野というのは「唯一単独」あるいはその実態を知ることが非常に難しい領域です。あえて言えば「不可知」の領域です。知の外側にある。

「倫理」や「道徳」の外側にあつて、そしてかつ「絶対的」で「不可知なもの」。フジタゼミでも雑談のなかで言っていますが、たとえば「献身」の例はどういうものがあるかということ、たとえば医学における「献体」という行為があります。自分が死んだら自分の身体を医学のために役立ててください、と言って、何の見返りも要求することなく自分の身体を捧げる。これは文字通りの「献身」でしょう。

2006.4.8のセミナーより

5 象徴平面とその外側

国が違えば、人種が違えば、文化が違えば、「道徳」もそれによって変わってくる。だから「道徳」は言ってみれば共同体の数だけあるということです。それは「象徴平面」で表わすと(図4)、この象徴表面がさまざまな文化——ちょうど世界地図みたいなもの、すなわち $\alpha, \beta, \gamma, \delta, \varepsilon \dots$ のようにしているいるあるとする。この丸く書いたのが「象徴平面」です。これが「道徳」の水準です。つまり「道徳」というのは同一平面上の異なる文化とか異なるものです。「道徳」の特徴は何かというと「平面的 plan」です。「道徳」はこういう「平面的」な水準で成り立っている。

では「倫理」は何かというと、「象徴平面」の外側に何か「最高善」のようなものが想定されていて、「象徴平面」から「最高善」に向かおうとする一連のベクトルがある。つまりここ(図4-4ページ)が「倫理」です。

では「献身」の領域は何かというと、「献身」もまた象徴の平面にないものによって暗黙の支配を受けている。象徴の平面にないものは何かというと「大文字の他者のなかに欠如している何ものか」なのです。「大文字の他者における欠如」(図4)との照合関係に置かれた、いわばもうひとつの象徴的な平面、ただしそれらは「シニフィアン signifiants」ではない。つまり従来「象徴平面」の外側にもう1個、このような平面を想定してやって(図4)ここに対して「照合関係」が置かれる。つまりここのは「照合関係」です。この中にバラバラに要素が散らばっている状態、お互いに連絡を持たない。お互いに連絡を持たない要素がバラバラに散らばっている状態です。

6 垂直的と離散的

ここの平面が「献身 le dévouement」の平面です。「象徴平面」の外側にある1個1個バラバラの要素、これは言ってみれば「サンブラン semblants」です。一方、「象徴平面」のなかでうごめいているのは当然「シニフィアン signifiants」です。ですから「シニフィアン signifiants」ではない「サンブラン semblants」によって構成されていて、かつ「シニフィアン signifiants」のように横に連鎖することがない。つまり1個1個バラバラの要素がこの平面の上に乗っている。これが「献身」の領野です。バラバラなのでこれを「離散的 discret」と言う。もともとは数学用語、コンピュータ用語です。これに対して「倫理」は「垂直的 vertical」です。

「離散的 discret」、これは面白いことに「慎み深い discret」という意味もある。「Elle est discrète(彼女は慎み深い)」とか

「Les femmes japonaises sont généralement discrètes。(日本人の女性は大概慎み深いです)」というように、よく日本人の女性に対して使われるような言葉です。これが「離散的」という意味にも繋がっているというのは何たる偶然なのか。何故ならば今問題にしている「献身」の領野というのは、大雑把な言い方をすると女性の享楽の領野なのです。その女性の享楽の領野を構成している「サンブラン semblants」が discret であるというわけです。つまり「離散的」であって「慎み深い」。

それで面白いのは、道徳、倫理、献身という一つの流れですが、人間の思想史の流れにおおまかに一致しているということです。(つづく)

図1

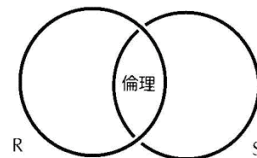


図2

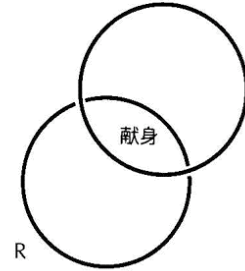


図3

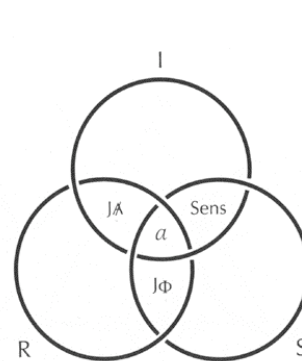
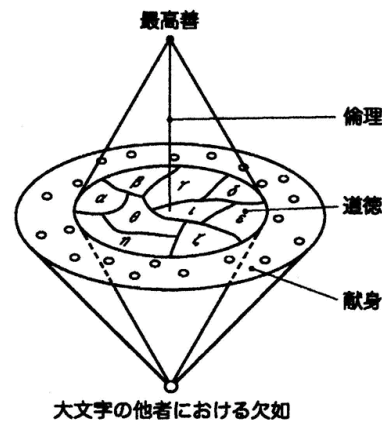


図4



Copyright 2001-2006 fujita hirosi, All rights reserved

今年はフロイト生誕150周年

今年はフロイト生誕150周年。生地ウィーンではモーツァルト生誕250周年と重なっていささか割を食った格好だが、それでもウィーンやロンドンのフロイト博物館では様々な催しが開かれ、またベルリンのユダヤ博物館では『PSYCHOanalyse』という風変わりな展覧会も開催されているようだ。

フロイトの誕生日は1856年5月6日、それから150年後の2006年5月6日、わたしはちょうどその日パリにいた。理由はハンス・ベルメールというシュルレアリスムの美術家の回顧展をポンピドゥー・センターで観るためだったが、それはまた別の話……ただ、折しもブリュッセルから訪れていた博学の美術史家JB氏のナビゲートのおかげもあって、偶然にもフランスにおけるフロイト生誕150周年を巡る一連の報道をリアルタイムで目にする事ができた。

たとえば5月4日付「リベラシオン」紙は「署名 ジグムンド」という読書特集を16ページに渡って組んでいたし、同じく5月4日付「ル・モンド」紙も賛否各々の立場からの論説を掲載。5月6日付「フィガロ」紙では1面のシラクの大きなカラー写真の斜め下にフロイトのモノクロ写真が掲載され、12面全てがこの150年前に生まれた天才のために割かれていた。その見出しは「フロイト、論争によって祝われた誕生日」……

論争が誕生日のプレゼント？たしかに19世紀が生んだ天才の過去の業績を称えて21世紀のこの日に150回目の誕生日を粛々と祝うというような雰囲気はそこにはまるでなかったし、昨年来の精神分析を巡る論争もしくは騒動を取りあげていない雑誌や新聞も一つもなかった。まさに生誕150周年は「論争によって祝われた誕生日」となったようだ。

精神分析を巡る論争は数々あれど、今回フランスで話題になっていたのは何といっても、この「セミナー通信」でも、2005年12月号の編集後記にその最初期の経緯をお知らせした『精神分析黒書 Le livre noir de la psychanalyse』を巡る論争とその顛末についてだった。昨年9月この本が出版されるやいなや、各新聞・雑誌がこぞ取りあげ、精神分析陣営からはジャック＝アラン・ミレール等が反論を展開、テレビでは討論番組が行われ、エリザベート・ルディネスコ女史は『どうしてこんなに嫌われる？：精神分析黒書の解剖学』を、ジャック＝アラン・ミレールは今年始めに『精神分析黒書』のタイトルと装丁をパロディ化したような『反精神分析黒書』（スイユ社）を編集・出版したりと、ここしばらく話題には事欠かなかったようだ。

精神分析に対する直裁な批判は、英語圏からもたらされることが多いように見受けられるが、今回の精神分析批判の書は、フランスの女性編集者によって編集され、日本でも『ラカンの思想』で知られるミケル・ポルク＝ヤコブセンの名が目立つ他は、フランスでいわゆる「認知行動療法」(TTC)を掲げる一派が主に名を連ねていたようだ。

既に最初の一閃着から半年が経つこの5月上旬、駆け足で回ったフナツクの精神分析コーナーでも、ティエリー・ガルニエやリブシーといったその方面の専門書店でも、この話題を巡る本の数々が平積みになっていた。先述の3冊の他、書店で目についたのはミケル・ポルク＝ヤコブセン等による『フロイト 関係書類』、トビー・ナタン監修による『精神分析の戦争』、その他『精神分析における戦争と平和』なんてタイトルの本も見かけたが、なかでもふっていたのが『精神分析の戦争』の副題「民主的な心理療法のためのマニフェスト」……そういえば今回の論争で、反精神分析陣営(?)の論調にこうした表現が目についた。そこでは「民主的」という表現は、精神分析に対して自らを正当化するためのとっておきのキーワードとして使われているように見えた。

ところでもう一つ、今回の一連の報道の中で目についたのは脳科学と精神分析の関係について触れた記事だろう。たとえば『レクスプレス』誌5月11日号には「科学はフロイトを正当化するか？」という長文の論説が掲載された。近年、英米圏を中心に、脳科学は精神分析を駆逐する、というような論調が目立っていたが、今回のフランスの一連の報道においては、脳科学の更なる発展にむしろ精神分析の知見が寄与しているとして、その最新の動向をかなり具体的に詳しく紹介していたのが目についた。そういえばフランスの報道ではないが5月25日付の『ロンドン・レビュー・オブ・ブックス』に寄せられたスラヴォイ・ジジェクの「Freud Lives!」というエッセイの冒頭もまた、近年の脳科学の進歩に乗じて「精神分析は死んだ」と唱えられている最近の風潮への言及から始まっていた。ジジェクはそこで「スペクタクルの社会」としての現代社会においてこそ精神分析の時代はむしろ始まったばかりなのだ、と逆説的に強調していたが、確かに「精神分析は死んだ」と繰り返し語り続けなければならないほどに、場合によっては徹底的に貶めずにはいられないほどに、むしろ精神分析は、そしてフロイトその人もまた、現在形で生々しく生き続けているということなのだろうか、と、にわかオプザーバーとしては思わずにはいられなかった今回の一連の報道であった。

(Yuko S)

心の問題を構造から考える

水上雅敏

連載 2 いじめと愛国心

仲間はずれにする、それも顔が悪いとか、メンバー数のキリが悪いとか、たわいもない理由で…。中学生間でこういういじめはよく在る。なぜか。

想像的な三角形を考えてみたい。これは自我とその鏡像、想像的第三項（想像的ファルス）との三つ巴である。鏡像とされた他者はどこまでも本人の主体ではないから、自我―鏡像間にズレ・隙間が生まれ、それが自我に反映される。例えば他者が思った通りに動かないことで不満を感じるように。しかし自我を支えるため鏡像はやはり求められる。自我―鏡像の関係は、このように愛憎うずまく関係と言えるだろう。想像的な第三者は、具体的には教祖の人物、中学生レベルだとリーダーや先輩などに投影されやすい想像である（必ずしも人物である必要は無かる）。それは掟（部活内の男女交際禁止 etc.）などの禁止をもってメンバー間の自我―鏡像関係のズレを調整（隠蔽・肩代わり）する。あるいは、自我―鏡像関係のずれの部分を埋める同一化対象ともなる。これらの温和な例としては、一部の年代層にしか分からないメールの文字などがあげられよう。ともかくあくまで閉鎖的な三角形と言える。（勿論、思春期は精神病構造とは違うから、基本的に象徴界が成立している上での、それを凌駕しようとする想像的関係の諸傾向を考察している）。

仲間はずれは、このような想像的三角形の安定を崩しかねないズレに置かれる想像（去勢されたファルスの想像）をある者に担わせることで、その安定を保つ方策と言える。そしてこのような閉鎖的グループを作るのは、思春期が性衝動が賦活され自我が揺るがされ易い時期であることにもよる。

しかし、やがては、子供たちはこのズレは埋めきれないことを受け入れ、ズレをシニフィアン連鎖で象徴化しようとする動きへと入っていく。各々は一体化しえない個人だと分かり、閉鎖的グループは溶解し、去勢・性・欲望の受容が進み、又、豊かな言語やイメージが生み出されていくこととなる。ここにある第三項はもはや顕現した存在でも掟でもなく、ズレ（去勢）を確定し、また顕現しないことでこそシニフィアン連鎖を触発している空虚な要素である（＝象徴的第三項）。

さて「愛国心」が取沙汰されている。これが教育されるとしたら、それは想像的三角形への退行の強要であろう。つまり「国」或いは「愛国心」なる理念、或いはそれを教育する政府・組織を想像的第三項としての。そして子供達は、卒業してもより広い想像的三角形に組み入れられるだけで、シニフィアン連鎖へと移行していく契機をいつまでも持てなくなるだろう。言語やイメージはこの想像的第三項を擁護するように編成され、ズレ・隙間の象徴化という本来の役割を担わされず、また個々が独立した存在であるという認識も育たないままとなる。かつての仲間はずれの心性は異端者や他国の排除に利用されることともなりかねない。そもそも「国」自体ももとは為政者の欲望によって区画付けられた想像的なものに過ぎない。又、「愛国心」の言葉で触発される国のイメージも、一人一人違うであろうし、よく考えるとそこに何も無かった、という人も多い

のではない。このようできえあるのに、何故「愛国心」を教育基本法に盛り込もうとするのだろうか。

少し前、『国家の品格』（藤原正彦、新潮社）という本が話題になった。「愛国心」教育にも通低しそうな誤ったロジックが窺えるので取り上げてみたい。著者は言う。「論理には出発点が必要」「まず A があって、A ならば B、B ならば C、C ならば D……という形で」。また「この A は論理的帰結ではなく常に仮説」であり、「この仮説を選ぶのは論理ではなく、主に人の情緒」とある。そしてそこに武士道精神特に「惻隠の情」を置くことを提唱している。しかし出発点のある論理などというものは、信念や主張に過ぎない。どれほど良く見えても自己愛から出発した論理である。真に論理的に考えると、今の自分の思考がこういう信念＝イデオロギーからではなく自己愛の無い空虚な起点から論理的に導きだされたものであるかどうか、を常に測ることだろう。起点が空虚で論理が進みうのかという心配はいらない。フォン・ノイマンは「空集合」から始めてそれまでの集合全体の集合を数え上げるという作業から自然数を作り出している。φ（空集合）を「0」、{φ}を「1」、{φ、{φ}}を「2」、このように。このように空虚な起点がいくらでも思考や分節された世界を生み出しうるのだ。「惻隠の情」もこのような自己愛の無い論理の結果として生まれてくるものだろう。個人の美意識や情緒が恣意的に論理の前提として選んで置くものではないのだ。「愛国心」について言えば為政者の間でそれは「郷土愛」の拡張だとの詭弁がなされている。「郷土愛」に窺えるような穏和で多少ともメランコリックな情緒とはなんだろう。それは幾分自己愛的だが「喪失」を受け入れてもいる反応ではないか。「喪失」の受容＝象徴化が為されるには、前提が空虚な（＝喪失された）論理からの思考が持ていなければならぬだろう。「愛国心」をこの前提に置くことは、この空虚であるべき位置を埋めることであり、期待されたような「郷土愛的愛」の発生はますます阻まれるものと考えられる。「惻隠の情」にしる「愛国心」にしる、外部から挿入しても望んだ結果を得られるものでもないのだ。

しばらくクラス崩壊、いじめ、少年犯罪が表に出ていたから「愛国心」、「国を愛する態度」等と教育に「指針」を入れたいものも分からぬではないが、しかし「指針」はそんなに大切なのか。「指針を持つこと」を疑わぬ若者たちがオームの犠牲になるのを見てきたではないか。違う「指針」を対抗軸に立てればよいというものでもないことは上に見てきた通りだ。今こそ思い切って「指針」を立てないこと、どれほど不安で不安定な道でもずっとそこに居続けることをぎりぎりの指針としてみてはどうだろう。そこでこそ自己愛の解体、自由、他者の独立性の尊重、他者や自分自身との弁証的な対話が進展するのではないか。学校のような教科も、そういう道で必要な論理性や情緒性等を培うものとして生きてくるのではないか。子供たちが閉鎖的グループから巣立つとき、そこに自由に思考を働かせせる開かれた場が用意されてあることが必要なのではないか。

みずかみ・まさとし（臨床心理士）



われながら酔狂な、とも思うのだが、今年になってパリへ5回も足を運んでいる。月に一回の割合だから、例年と比べればかなりの頻度だ。せっかくだから、本屋巡りの方が楽しい夫をだましまし、ミッテランのグラン・ブロジェのひとつである新国立図書館（ドミニク・ペロー作）やカルティエ財団（ジャン・ヌーヴェル作）など、パリに加わった新しい景観に親しむ機会を作って、マンネリを抜け出す努力をしているところ。機は熟してきた。東京から遠来の S さんが付き合ってくれることになって、パリ近郊にあるというモダン建築の金字塔、ル・コルビュジエのサヴォア邸行きが決まった。

時は5月。世界で一番美しい町が、一年の内で最も愉悅に満ちて輝く頃である。公園に遊歩道に花々があふれ、マロニエも一杯に葉を広げ、白い花、赤い花をつける。だから爽やかな春の遠足を当て込んでいたのだが、この日のパリは前日と打って変わって朝から雲がたれこめ、冷え込んでいる。

郊外へ出る RER の A 線の通るオペラ座あたりから、ポワスイ行きの電車に乗り込み25分ほどで終点に着く。2キロ弱の距離は好天ならちょうどよい散歩になるが、糠雨が降り出しそうな空模様である。タクシー乗り場にタクシーはいない。平日のさびしい郊外の駅前である。サヴォア邸の前はバス停で、降りてはみたものの、それらしいものがいっこうに見えない。運転手さんが、「あっちだよ」と指差している。めざす建物は目と鼻の先にあるのだが、なるほどアプローチを劇的にして物語性を作っているというのはこういうことなのか、と思う。通り側には高い木立に囲まれた遊歩道があり、少し行って右に折れると生い茂る木立の間から、緑の敷地から浮いたようにすっきりと細長く水平に広がる白い箱が姿を現した。木立が切れたところで突然全容が目に見え込む。

軽やかである。ル・コルビュジエの十八番のピロティーの効果である。細い白い円柱の列が、連続する窓でぐるりとリボンを巻いたような立方体の住居部分を持ち上げているのである。ピロティーの中に扉を緑色に縫ったガレージがあり、支柱の間を抜けて車をすべりこませる仕組みである。

さて入り口は？ またしても戸惑う。サヴォア邸は歩かせるのがテーマであることにまだ気が付いていなかった。ピロティー部分を右にぐるっと回ると控えめな黒いドアがあり、「靴の泥を落としてください」と張り紙があるので玄関とわかる。フランス政府の管理下にあるサヴォア邸は公開されており、月曜を除く毎日見学者を受け入れているのである。入場料を払っていったん中に入れば、自由に歩き回ることができるし、撮影も禁止されていない。プラハ郊外にあるアドルフ・ロースのミュラー邸は、定員制で予約を取る必要があったし、ユトレヒトにある有名なリートフェルトのシュレーダー邸も同様のはず。年中訪問者を受け入れている「住宅」は珍しいと思う。

清水由美子 サヴォア邸探訪

パリから西へ30キロほどのセーヌ川の通るポワスイに、二つの大戦の間にかくも斬新な住宅が建ったいきさつは、保険会社の重役だったサヴォア氏とその妻が週末に過ごすため田園の中に立つ家の設計を注文してきたことに始まる。建築年は1928-31年。フランスの伝統工芸をバージョンアップしたようなアール・デコと一線を画したル・コルビュジエが、杭でもちあげるピロティーを採用する案でゴーサインをもらい、彼の言うところの近代建築5原則の集大成を遂げることとなった。その頃、パリ発で一世を風靡したアール・デコの建築への応用は、むしろニューヨークやマイアミで大きく花開くことになった。エンパイヤステートビルの完成は、サヴォア邸と同じ1931年だ。

いよいよサヴォア邸の内部である。まずはピロティーで囲まれたガレージと玄関部分、使用人室などのある地上階がある。そして、テラス（屋上庭園）に連なるリビングやキッチン、主寝室などを配したピアノ・ノービシがある。テラスには、日本では北海道に咲くライラックが濃い紫の花房を垂れている。控えめな3階には日光浴のできるソラニウムがあり、これら3つの階が、ル・コルビュジエ自慢の緩やかなスロープでつながれると同時に、実に美しいフォームの螺旋階段が全階を貫いている。上下に、斜めに、水平に自由自在に移動する時、目の前に異なる光景が次々と現れるのが売り物で、名づけて「建築的プロムナード」。

インテリアも真っ白かと思いきや、壁ごとに水色、淡い柿色などのいく種ものパステルカラーを多用し、時にはヴィヴィッドカラーを塗り込めているのは意外だった。細い長い廊下など、一方の壁は白、向かい合う壁は濃い青で塗りつぶされている。いったい、これはどういう発想なのだろう？ ファン・ドゥースブルグやモンドリアンの「デ・スタイル」の新しい造形感覚の影響や、画家オザンファンと共に「ピュリスム」を唱えた彼自身（画家としての名前はジャンヌ）の絵画観との関係があるに違いないけど、建築関係の人のテキストではほとんど言及されていない部分。ともあれ、彩色された壁は、光の変化に伴って様々なニュアンスを与えたことだろう。

大戦中はナチが、その後は連合軍が接収、その果てに壊されてしまふところを、1962年、アンドレ・マルローが保存を決めたサヴォア邸は、近代建築のカノンとして建築ファンの巡礼地となっている。マルローを持たなかったベルギーは、1965年、世界中の名だたる建築家の猛反対にもかかわらずオルタの「人民の家」を破壊した。そうそう、最近の話では、富豪フランソワ・ピノーのコレクションを収めるためのセーヌ川中洲の現代美術館に安藤忠雄のデザインが選ばれ、大いに期待されたが、建つ前に破壊されてしまった。こちらは行政の対応の悪さに痺れを切らしたピノーが、ベネチアのパラッツィオ・グラッシにコレクションの移転を決めてしまったため。しみず・ゆみこ（ブリュッセル在住）

EUROCLINIQUE.COM

ユーロクリニック美容外科 TEL 0120-955-111



〒359-1123 静岡県沼津市1-1-1 美さ各館2F 3F

予告！ 次回のマンスリー対談は・・・？

『藤田博史・マンスリー連続対談シリーズ』

第13回

ゲスト：高橋アキ（ピアニスト）

2006年9月14日（木）19:00～22:00

カフェ・バー『CREMASTER（クレマスター）』2階

東京都新宿区歌舞伎町1-1-5 花園ゴールデン街

定員：10名 入場料：2,000円（1ドリンク付）

予約：電話での受付になります(予定数になり次第受付終了)

EUROCLINIQUE ユーロクリニック文化部 tel:042-308-7637(10:00~19:00)

CREMASTER クレマスター tel:03-3203-3620(19:00~23:30 祝祭日を除く)

テーマは決まり次第「藤田博史の公式サイト」にアップいたします。

お問い合わせはユーロクリニック文化部まで。

Information

* 藤田博史の『性倒錯の構図 増補新版』（青土社刊）に新たに付け加えられた論文「性倒錯のトポロジー 道徳・倫理・献身の位相」の図9及び図10に誤りがあります。訂正図版ご希望の方は、ユーロクリニック文化部までお気軽にお問い合わせください。

* 8月の公開セミナーは、第2週土曜日が日仏会館休館のため、第1週土曜日8月5日に開催いたします。お間違いのないようご注意ください。

* 精神分析医 藤田博史の公式サイト <http://www.foujita.com>
 * ユーロクリニック公式サイト <http://euroclinique.com>
 * ユーロクリニック文化部ブログ <http://eurodc.exblog.jp/>

SÉMINAIRE OUVERT PERMANENT

juillet 2006 No.25-44

『セミナー通信』フリーペーパー版 2006年7月号

発行 EUROCLINIQUE 編集 ユーロクリニック文化部 榊山裕子

tel: 042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

メールマガジン版もあります。E-mail: seminaire@mac.com までお申し込み下さい。